

筑波大学図書館蔵『南山考講記』について(1)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩本, 真理 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2006025

Title	筑波大学図書館蔵『南山考講記』について(1)
Author	岩本, 真理
Citation	人文研究. 52 巻 4 号, p.421-432.
Issue Date	2001-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

人文研究 大阪市立大学文学部 紀要
第52巻 第4分冊 2000年 1頁～12頁

筑波大学図書館蔵『南山考講記』について(1)

岩 本 真 理

はじめに

本稿は、筑波大学（前東京教育大学）図書館蔵『南山考講記』（全五巻）についての報告である。

拙稿1989は、『南山考講記』を『南山俗語考』の成立過程を検証する資料と位置づけて、両者を比較対照しながら初歩的な報告をおこなったが、その際使用した『南山考講記』は『唐話辞書類集』第五集（汲古書院 1971年発行）所収本に限られていた。その時点では、諸機関で所蔵されている『南山考講記』の残本、異本を閲覧する機会に恵まれていなかったためであるが、『唐話辞書類集』所収本のみが、完全無比であるかのような錯覚がどこかに生じていた可能性もある。『唐話辞書類集』所収本（故長澤規矩也氏所蔵）は八巻が揃い、頁数をつけて刊行された影印本である。閲覧に誠に便利であり、後学のために潔く私本を提供された先学に対して、感謝の念に堪えない。

しかし、この影印本にも若干の問題点が指摘しうる。例えば、初めに書かれていた語釈を消して後から訂正したと思われる痕跡が数カ所みられる。またカナによる唐音表記は、通常当該字の右側につけられるが、当該字の左右に二種の表記を併記していることが影印本からもみてとれるところが数カ所ある。もし、故長澤規矩也氏所蔵本を直接閲覧できたならば、墨色の違いなどから、修訂のプロセス解明のための更に新たな手がかりが得られることが期待される。

影印本の更なる問題点として、巻の配列があげられる。長澤規矩也氏は『唐話辞書類集』第五集の解説において以下のように述べておられる。

「第八冊の『君臣唐話』には跋があるから、末冊であることに相違はないが、この部分のみ内閣文庫に傳鈔本（印目に著者名を佚す）がある。第二・四冊は題箋で決めてもよいが、他冊は題箋を佚しているの

で推定にまかせた。前四冊には分類項目がなく、次の三冊には俗語考のやうに項目がある。」^{注1}

題箋が残されていない巻については推定によらざるを得なかったとの弁で、これは影印本化にあたってのやむを得ない処置であるが、この処置ゆえに、巻の配列について固定した見方を与えてしまった側面もあろう。

今回の報告では、まず巻の配列について、筑波大学図書館所蔵本（以下、筑波本と略称）と『唐話辞書類集』第五集所収本（以下、『唐話辞書類集』本と略称）の相違点を洗い出し、また筑波大学図書館以外の機関（沖縄県立図書館、琉球大学、内閣文庫）で所蔵されている異本についても簡単にふれる。

1 筑波大学本の構成

筑波大学本は、五巻二冊からなる写本で、大きさはタテ23.8cm、ヨコ17.5cm。二冊とは「巻之一」・「巻之二」・「巻之三」を収めた「天」冊と、「巻之四」・「巻之五」を収めた「地」冊の二冊をいい、表紙題箋に「南山考講記 天」「南山考講記 地」と記されている。巻については、各巻の巻頭に「南山考講記巻之一」「南山考講記巻之二」等と明記されている。「巻之五」から「巻之八」までを収録した「人」冊の存在が推測されるが、散佚したものと思われる。半葉ごとの行数は、「巻之一」九行、「巻之二」十行、「巻之三」九行、「巻之四」九行、「巻之五」七行と不揃いである。ついでながら、『唐話辞書類集』本では毎半葉七行に統一されており、筑波大学本の「巻之五」のみが、体裁においてこれと一致している。

一行を三段に分けて三語を並べる方式がとられ、各語の横にカナによる唐音表記が付され、各語の下に小字二行に分けて語釈が載せられる^{注2}。五文字を越える長い語の収録にあたっては、一行に二語、あるいは一行に一語のみをあてる。なお、これは、『唐話辞書類集』本や、『南山俗語考』の諸本においても見られる体裁である。

まず下の表によって『唐話辞書類集』本と筑波本の構成の概略を示す。「」～「」で示したものは巻頭と巻末の語である（ただし、第八巻の『君臣唐話』は君臣間の会話の体裁をとっているので巻頭・巻末語をあげない）。巻内の語彙の配列の差や、語釈、カナによる音表記の差異については、別の節において論じる。なお、備考欄に別の機関に所蔵されているものの存在を示しておいた。

『唐話辞書類集』本	筑波大学本	備考
第一巻 pp.1-54 題箋なし 「生兒子」～「確門路」	地冊 卷之四 全20葉 題箋「南山考講記 地」 「生兒子」～「説人情」	
第二巻 pp.55-116 題箋「南山考講記 二」 「拿茶來」～「會透汗」	天冊 卷之二 全21葉 「拿茶來」～「打攪了」	
第三巻 pp.117-178 題箋なし 「讀、書」 ～「拿尺來量、看」	天冊 卷之一 全24葉 題箋「南山考講記 天」 「讀、書」 ～「拿尺來量、看」	沖縄県立図書館に 所蔵
第四巻 pp.179-240 題箋「南山考講記 四」 「今日天氣好」 ～「倒吊塵」	天冊 卷之三 全24葉 「今日天氣好」 ～「倒吊塵」	
第五巻 pp.241-326 題箋なし 「天地」～「樞子」	地冊 卷之五 全41葉 「天地」～「煙火」	琉球大学、内閣文 庫に『南山俗語 琉球詞和解』とし て所蔵
第六巻 pp.327-378 題箋なし 「捨死力戦」～「行家」	なし	
第七巻 pp.379-452 題箋なし 「豆腐」～「險」	なし	
第八巻 pp.453-494 題箋「南山考講記 八」	なし	内閣文庫に『君臣 唐話』所蔵

この表から明らかなように、筑波本と対照させると、長澤氏による巻次の配列順が決定的なものとはいいがたくなる。『唐話辞書類集』本で題箋が残されている第二巻、第四巻、第八巻のうち筑波本と巻次が一致するのは第二巻（筑波本の天冊 卷之二）に限られる。なお、偶然の一致か、筑波本の地冊卷之五は長澤氏の推定で第五巻に配されている。

ただし、長澤氏の推定された巻次の順が、筑波本と一致しないからといってその推定が誤りであると断言することもできない。筑波本の配列は各巻巻頭に明記されているので、動かぬものではあるが、だからといって、筑波本こそが『南山考講記』本来の姿であるとの主張にはつながらないからである。筑波本にせよ、『唐話辞書類集』本にせよ、稿本であったことは、おそらく間違いがない。拙稿1989で述べたとおり、『南山考講記』に収録された語彙は、配列、カナによる音表記、語釈のいずれの面でも手が加えられたうえで、『南山俗語考』（全五巻）に収められる。配列に関しては『南山考講記』と比べるととりわけ大きな変更が加えられており、巻ごとにまとまった形で『南山俗語考』に収録されているわけではない。かりに『南山考講記』全八巻内と『南山俗語考』全五巻内の語彙の配列の異同を表によって明示しようとしても、あまりにも複雑なものとなる。つまり、『南山俗語考』は、語彙の配列に関する限り、『南山考講記』各巻の独立性を薄めたうえでの再配置をおこなったのである。改訂の途上では、関連した語、類似した語を同一箇所配するため、しかるべき語を探し出す作業がまず必要となるのだが、その際、『南山考講記』内の同一の巻だけでなく、別の巻からも探し出し、見つけては並べかえるという根気のいる作業が、長年に渡って継続されてようやく『南山俗語考』の刊行に到ったと推測される。

では、上の表にみられる不一致、すなわち、『唐話辞書類集』第四巻（題箋によって明示されている）が筑波本の天冊卷之三にあたるというこのずれは、なにゆえに生じたのであろうか。『唐話辞書類集』本と筑波本は別の系列で二種の『南山考講記』が存在していたと考えるべきであろうか。筆者はむしろ次のような仮説を提示しておきたい。すなわち後から成立したものは、先に成立していた稿本を引き写したのだが、巻そのものの順序には手を加えた可能性がある。

まず成書の順について筆者は『唐話辞書類集』本が先であったと考える。なぜなら、筑波本は、かなり短期間に抄写したものらしく、粗雑といってしかるべきものである。例えば、字の乱れが散見し、カナによる音表記が頻繁

に脱落するだけでなく、語釈やカナによる音表記を写す際に、当該語のものではなく右隣の行のものを誤って写しとった箇所が数カ所もある。また、筆写者の唐話、唐音への未習熟さを示す例として、カナによる音表記が、当該字からずれている箇所が散見する点もあげられよう。例えば、「擱起来（コ キイ ライ）」（巻之二26葉）について、「擱」に「コキ」、「起」に「イ」をあてており、どの字がどの音節と対応するのかすら把握されていないことがわかる。こういった特徴から、唐話にさほど習熟していない者が正確な知識のないままに、とにかく写し取ったものという印象を拭い去れないのである。

このように述べたからといって、「筑波本は『唐話辞書類集』本そのものを机の上に並べて、草々に抄写したものである」と主張するのでもない。後述するように、語の配列とカナによる音表記は、筑波本と『唐話辞書類集』本でかなり違いがあり、筑波本はこの面では意識的な改訂をおこなったと推測される。筑波本そのものは、粗雑なできではあるが、その元となったものは、おそらく『唐話辞書類集』本そのものではなく、何らかの修訂をほどこした別の本がすでに存在しており、その別本を書き写して成立したものが筑波本であると筆者は推測する。

ついでながら、筑波本が基づいた本と『唐話辞書類集』本とが異なるものであった可能性を示唆するものとして、『唐話辞書類集』本、『南山俗語考』のいずれの本にも現れず、筑波本にのみ収録されている語の存在があげられる。「篩箕」（地冊巻之五57葉）がそれである。また、筑波本と『唐話辞書類集』本で若干相違する例としては、「方便些」（『唐話辞書類集』本P.72）と「方便〃〃」（筑波本天冊巻之二31葉）がある。これも、筑波本の依拠した本と『唐話辞書類集』本とが、完全に一致するわけではないことを示していよう。なお、『唐話辞書類集』本の語釈の明らかな誤りが、筑波本では正しく記載されている箇所が一箇所ある。巻之五38葉親族に収められた「令祖」に対して「御祖父」が語釈にあてられており、『唐話辞書類集』本の「御祖母」とは異なり、正しい誤訳があげられている。ついでながら、琉球大学と内閣文庫に残る『南山俗語 琉球詞和解』においては、この箇所に「御祖父」の語釈があてられている。

さて、筑波本には全書にわたって、書き誤り、書き漏らしが広くみられる。具体例の列挙は、紙幅の関係で省略するが、書き誤りを後から訂正した箇所、書き漏らし部分に後から補足している箇所を以下に示しておく。

- ◇誤字 好然野（天冊卷之二40葉） 【上の余白に「煞」を加える】
声音哩了些（天冊卷之二42葉） 【上の余白に「唾」を加える】
像箇睹（天冊卷之三47葉） 【上の余白に「晴」を加える】
搓艾圖（天冊卷之三53葉） 【上の余白に「圓」を加える】
- ◇誤記 入贅女婿 イクムコ（地冊卷之五41葉）
【横に「ク」を消して「リ」に直す】
- ◇転倒 又看好（天冊卷之一22葉）
✓ ⇔ 又好看（『唐話辞書類集』本 p.172）
【転倒を示す表示】
- ◇脱落 洗々手 洗々脚 洗々湯（天冊卷之一19葉）
【上の余白に書き加える】

【 】で示したものは、草々のうちに書写した際に生じた誤りを後から訂正したものといえよう。

次に、筑波本の語の配列について、簡単にふれておく。筑波本は同一巻内での語彙の再配置を試みたと思われる部分がある。巻を越えて、他巻の関連語を移動させるというケースはみられないが、巻内での移動はかなり頻繁にみられる。例えば『唐話辞書類集』本の各巻の末尾近くの語彙は、それに対応する筑波本の巻内においては、同じ巻内の別の位置に置かれていることがある。逆から述べると、『唐話辞書類集』本の巻末には、語義別の分類ではぴったりと合致するグループがみつからず、所属先のはっきりとしない数語がとりあえず置かれたものとの解釈も可能なのである。つまり、類義語や関連性のある語といった、語彙のグループ分けから抜け落ちて、収録先のないものが、集められたとの印象を与えるのである。

筑波本は、語彙配列にあたって、その体系化が明確に意識されたものではないにせよ、多少なりとも関連性のある語の近くに配する努力が払われたものとみえる。もちろん十分に整理されたものとはいいがたいが、語の配列に意識的に努めた可能性は高い。上記の表の中で筑波本巻之二、巻之四の巻末語が、『唐話辞書類集』本と一致しなくなっているのはその現れともいえる。

なお、筑波本巻之五と『唐話辞書類集』本第五巻の巻末語も一致しない。この巻は、「天文時令地理」、「人品」、「親族」、「身軀」、「器用」の項目がたてられ、分類別配列になっている。他巻と異なり、筑波本と『唐話辞書類集』本の間で語の配列順に大きなずれはみられず、わずかに数例の異

同がみられるだけである。例えば、「櫃子」は『唐話辞書類集』本第五巻巻尾にあり、「器用」の最後に置かれているが、筑波本巻之五では「器用」一葉目の同義語「夾幔」の後に置かれている。筑波本のほうがこの点では優れているといえよう。

さて、巻内の配列についての検討はここまでとして、巻次の配列に移ることとする。筑波本が（あるいはそれが依拠した別本が）、天・地（・人）に分け、各巻をこのように配列した意図は何なのか。現存する筑波本の「巻之一」から「巻之五」の配列に段階性や体系性に基づいた意図といったものは看取しにくい。岡嶋冠山著『唐話纂要』（『唐話辞書類集』第六集による）の六巻の構成と比較して検討しよう。

第一巻 二字話 三字話

第二巻 四字話

第三巻 五字話六字話 常言

第四巻 長短話

第五巻 親族 器用 畜獸 蟲介 禽鳥 龍魚 米穀 菜蔬
果蔬 樹竹 花艸 船具 数目 小曲 正頭

第六巻 孫八救人得福

『唐話纂要』の第一巻から第四巻は、二字の単語から始め、次第に長いフレーズ、成語、対話へとより複雑なものへと配列して、段階に応じた編纂方針がうかがえるが、筑波本の巻之一から巻之五には、『唐話辞書類集』本と同様にそのような配慮はみられない。

なお『唐話纂要』第五巻にみられる分類項目別の語彙収録は、筑波本の地冊巻之五（『唐話辞書類集』本の第五巻）に踏襲されている。前述した通り「天文時令地理」、「人品」、「親族」、「身軀」、「器用」の五項目であるが、『唐話纂要』で「親族」、「器用」に収録されている語と『南山考講記』の当該項目内の語彙とが完全に一致しているわけではない。体裁のうえでは踏襲しているものの、独自の語彙と配列方針がうかがえるが、本稿では、これ以上『唐話纂要』との比較にはふれず、別稿にゆずることとする。

さて、前節で引用したように、長澤氏は巻の配列決定の拠り所として、語彙の分類項目の有無をあげておられ、同氏推定による第一巻から第四巻には語彙の分類項目がなく、同じく第五巻から第七巻にはそれが明示されていることに着目しておられる。これは語彙収録の方針の違いとして見落としてはならぬ特徴であると筆者も考える。第五巻から第七巻は、分類項目がはっきり

りと示されているだけでなく、他巻に比べ、名詞の列挙が多く、あたかも単語集の趣を呈している。一方、他巻には長い見出し語が頻出する。すなわち、単純な単語だけではなく、それらが組みあわさって構成される述語群や、補語をともなう複雑な述語群、さらには単文、複文をも他巻は見出し語として収録している。これは『南山考講記』全八巻のうち、『君臣唐話』を除く七巻が、「項目別単語集」として分類された語を提示する巻と、述語類のバリエーションなどを提示する巻とに分かれていることを物語っている。

この特徴からみると、長澤氏による『唐話辞書類集』本の巻の配列は一定の説得力をもっている。しかし、筑波本と『唐話辞書類集』本で巻の順序が食い違う理由そのものは明確な理由づけができず、引き続き検討が必要である。もし将来、種智院大学に所蔵されている『南山考講記』の閲覧がかなえば、何らかの手がかりがつかめる可能性があり、それによって、筑波本・『唐話辞書類集』本とは異なる配列が発見できるなら、新たな別本の存在も考慮にいれる必要があるだろう。

2.『南山俗語 琉球詞和解』について

前節でも少しふれたが、『南山考講記』には、筑波本とは更に別の、残本、異本が確認できている。筑波本巻之三（『唐話辞書類集』本第四巻）に相当する沖縄県立図書館所蔵本と、筑波本巻之五（『唐話辞書類集』本第五巻）に相当する内閣文庫、琉球大学伊波文庫の所蔵本である。筑波本巻之五（『唐話辞書類集』本第五巻）相当分の二種はいずれも『南山俗語 琉球詞和解』と題されている。

まず、沖縄県立図書館所蔵本（旧東恩那文庫所蔵）であるが、毎半葉七行からなり、基本的に一行に三語を配している。この体裁は『唐話辞書類集』本と一致する。なお表紙題箋は『南山考講記』のみが判読でき、巻数はみえない。語の配列、カナ音表記、語釈ともに『唐話辞書類集』本第四巻と一致する。唯一違いのみられるのは、「両柱間」の語釈部分で、濁音の表記があるかないかの相違だけである（『唐話辞書類集』本は「フタハシラ」、沖縄県立図書館所蔵本は「フタバシラ」と表示）。全般的に端正な筆致で書かれ、誤字や訂正箇所などはみられない。筑波本の雑然とした印象とは大きく異なる。筑波本は『唐話辞書類集』本、沖縄県立図書館所蔵本と比べて、配列上の異同が多く、カナ音表記においても違いがめだつ。沖縄県立図書館所蔵本は、上述の一点を除いて『唐話辞書類集』本と一致する。『唐話辞書類

集』本と同系列の写本として完成していたもののうち、この巻だけが残巻となり伝えられたものと考えるのが妥当ではなかろうか。

次に、『南山俗語 琉球詞和解』についての検討にうつる。これは『唐話辞書類集』本第五巻に相当するものであるが、現在、琉球大学図書館伊波文庫に収蔵されているものと内閣文庫文鳳堂雑纂第三十冊『琉客談記』内に収められているものの二種が確認されている^{ie3}。伊波文庫本は表紙題箋に『南山俗語 琉球詞和解』とある。また、毎半葉7行、各行に三語ずつ配列する体裁は『唐話辞書類集』本第五巻に一致する。内閣文庫本では、『琉客談記』の体裁を襲って毎半葉11行となり、各行には三語ずつが載せられている。

収録語彙の内容は、どちらも『唐話辞書類集』本第五巻と同じく、「天文時令地理」、「人品」、「親族」、「身軀」、「器用」の項目に分けた配列をとる。語の順序に異同はみられず、項目ごとの語彙の収録が終わると、葉のなかばで数行を残したままでも、次の葉から新たな項目を始めている点でも、三者は一致する。項目ごとの配置がとりわけ強く意識されたことの現れでもある。

語釈の面では、伊波文庫本、内閣文庫本ともに、先に述べた「令祖」が「御祖父」となっている点を除いて、『唐話辞書類集』本第五巻と一致している。一方、カナによる音表記では、内閣文庫本に、わずかながら書き直したと思われる箇所がみられる。伊波文庫本は端正な筆致で一貫しており、書き直しなどはみられない。先に述べた沖縄県立図書館所蔵本と同様に、『唐話辞書類集』本と同系列の写本として完成していたもののうち、この巻だけが残巻となり伝えられたと考えることも可能ではある。しかし、その題箋に『南山俗語 琉球詞和解』と明記された由来を明らかにする必要があるが残っている。

さて、内閣文庫本は、前述した通り、『琉客談記』の中に含まれている。『琉客談記』は、島津重豪が1779（寛政9）年に造士館の教授であった赤崎貞幹に命じて書かせたものとされる^{ie4}。1778（寛政8）年に琉球謝恩使・尚恪は、琉球国の尚温王の即位を報告し、感謝の意を表するために江戸に出向いた。その際、薩摩藩邸に滞在し、重豪は謝恩使の随従者の二人と唐音で会話を交わしたという。この時の談話を日本語で筆記させ、『琉客談記』と題した。随従者の二人とは鄭章観、蔡邦錦の二名をいい、いずれも久米村の出身で、清国の福建に渡り、当地の学校で学んだ者であるという。重豪は自由

に唐話を操って、清の風俗を問い、見聞を広める努力を惜しまなかったものとみえる^{注5}。なお、重豪は、江戸の本草学者田村藍水に命じて、琉球諸島の産物を広く集めた『琉球産物誌』を完成させ、1770（明和7）年に上梓した^{注6}。これは、重豪が自ら、かねてより収集していた琉球の草木十櫃を藍水に提供して、彩色図とともに、名実の同定をさせたものである^{注7}。重豪自身の本草学への興味が、早くから芽生えていたことを示すが、興味深いことにこの時点での藍水との接点が、後の『成形図説』や『南山俗語考』の成立に大きくかかわってくる。藍水の門人のうち、出藍の誉れが高かった曾榮は後に重豪の侍医兼記室（秘書官）となり、『成形図説』を編纂し、『南山俗語考』の校訂にたずさわるのである^{注8}。

さて、薩摩藩と琉球との関係について言及しておかねばならない。1606（慶長11）年の島津家久による琉球侵攻以後、琉球国の対中国朝貢貿易を隠れ蓑として、薩摩藩は密貿易を行ってきた。重豪の時代も例外ではなく、鶴丸城東隣に設けられた琉球館に琉球人が在番していた。薩摩藩の財政再建に手腕を発揮した調所宏郷は、積極的に貿易を推進した^{注9}。重豪にとって、琉球は本草学的な興味だけでなく、実利面においても極めて重要な地域であった。

『南山俗語 琉球詞和解』が成立する背景には、このような一面があったことを看過すべきではない。しかし、ふたたび、『南山俗語 琉球詞和解』に収録された言語的な特徴に着目すると、これらが『唐話纂要』の体裁を襲い、語彙においてもかなり重複することが確認できる。書名から想像されるような、琉球方言を収録したものでないことは言うまでもない。今後の検討課題としては、いわゆる琉球官話における使用語彙との対比による更なる検証が必要である。長崎唐通事の系列で学ばれた唐話と琉球官話との相違はどの程度のものではあったのか、あるいは規範意識のなかで、それぞれの独自性は薄れていたのか、引き続き検討しなければならない。

重豪と唐通事との関わりについてふれておかねばならない。重豪は1771（明和8）年に長崎を訪れ、その四年後には元唐通事林梅卿（市兵衛）が鹿児島を訪ねている。後に林梅卿の嫡孫百十郎が、鹿児島に移り、その子孫は唐通事再興を図ることになる^{注10}。重豪自身が操った唐話は恐らく長崎唐通事の影響の強いものであったと推測される^{注11}。『南山俗語 琉球詞和解』の書名を冠している事情には、「琉球詞」と名乗ることで中国との交易の実態を若干なりとも隠すための方便であったかもしれない。

なお、この『琉客談記』と『南山俗語 琉球詞和解』とが同時に成立したとみなす根拠は弱い。なぜなら、『琉客談記』内に記された内容に即した語彙が付録として収録されたとはみなしにくいのである。前述した通り、『南山俗語 琉球詞和解』は整理の行き届いた単語集の趣を呈しており、内容において『唐話辞書類集』本（すなわち『南山考講記』の第五巻）とかわることがないからである。『琉客談記』の筆者が、既に成立していた語彙集を付したと考えられるのである。

また、書名の前半部分、すなわち「南山俗語」に着目するなら、『南山考講記』から『南山俗語考』へと改訂される途上において、すでに整理のすんだ部分から、『南山俗語』の名を冠して写本として世に出され、ごく一部では流布していた可能性が考えられる。伊波文庫本の存在はこれを裏付けるものである。

注

1 拙稿1991、1992、1993では『唐話辞書類集』本の『君臣唐話』と、内閣文庫所蔵の『君臣唐話』とを比較検討し、両者は完全に一致するものではなく、内閣文庫所蔵の『君臣唐話』は『南山考講記』から『南山俗語考』へと改編される途上の産物である可能性を指摘した。なお後述するように、内閣文庫には別に『南山俗語 琉球詞和解』として所蔵されている資料があるが、これは『南山考講記』内の一部と一致している。

2 ここでいう「語」とは、辞書の見出し語の意味である。『南山考講記』、『南山俗語考』の見出し語には、厳密に言えば複文とよぶべき、長いものが含まれている。

3 『琉客談記』は、国書総目録によれば、内閣文庫以外にも複数の所蔵機関が確認できる。それらが、『南山俗語 琉球詞和解』を有しているかどうかは現時点では未確認である。本稿は内閣文庫本についてのみ報告し、他の所蔵機関についての調査は今後の課題とする。

4 芳1995 p.134

5 芳1995 pp.134-135

6 上野1982 p.141 なお原口1973は1771（明和8）年に成立したとする。

7 上野1982 p.144

8 上野1982 p.145

9 原口1973 p.190

10 林2000 pp.195-196、 pp.204-208

11 しかし、薩摩藩における唐通事養成は重豪に始まるものではない。松下1988を参照されたい。

参考文献一覧

- 石崎又造1967 『近世日本に於ける支那俗語文学史』 清水弘文堂
- 岩本真理1989 「『南山俗語考』のことば」『鹿児島経大論集』
30巻1号pp.81-107
- 同上1991 「『南山俗語考』の唐音について1」『人文研究』
43巻11分冊pp.1-27
- 同上1992 「『南山俗語考』の唐音について2」『人文研究』
45巻5分冊pp.1-34
- 同上1993 「『南山俗語考』の唐音について3」『人文研究』
45巻5分冊pp.1-30
- 上野益三1982 『薩摩博物学史』 つかさ書房
- 芳即正1995 『島津重豪』 吉川弘文館
- 林陸朗2000 『長崎唐通事－大通事林道栄とその周辺』 吉川弘文館
- 原口虎雄1973 『鹿児島県の歴史』 山川出版社
- 松下志朗1988 「鹿児島藩の唐通事について」『鎖国日本と国際交流』
下巻pp.423-445 吉川弘文館

付記

琉球大学図書館伊波文庫本については三浦國雄教授より御教示いただいた。
ここに記して感謝の意を表したい。